

# 日本語のかな文字とローマ字の歴史

—江戸末期から明治中期にかけて—

## History of Japanese Kana and Romaji

— From the Late-Edo Era to the Mid-Meiji Era —

福元 美和子、小嶋 栄子

はじめに

本稿は、小嶋 (2001)「日本におけるローマ字の歴史」を基礎としながら、より時代範囲を絞り、またあらたに「かな文字の歴史」についての事柄を加えて、年代順に並べなおす作業を行い、今後の研究の資料とすることを目的としている。

本稿で取り上げる江戸末期から明治中期 (1866-1897) は、小嶋 (2001) にもあるように「日本人が日本語を書き表す」ことについて深く考え、識者らによって公の場で提案がなされ、後に起こるさまざまな国字問題運動における礎の時代だと言える。

また、本稿では論じないが、この時期は、「話し言葉」についても議論が盛んになる。江戸時代は、身分や地域によって話す言葉は大きく相違していた。違う属性同士ではコミュニケーションが図れないほどの隔りがあった。明治時代に入ると、外国文化や物流も盛んになり、コミュニケーションを円滑にしていく必要を国民レベルで感じるようになっていく (イ 2012、沖森 1989、酒井 1996)。これは、明治 20 年以降の「言文一致運動」の根幹となる変化である。

以上、この時期をあらためて時系列的にみることは、日本語学説史研究を進めていく上で一つの資料となるかと考える。

### 1. かな文字とローマ字の歴史

文学的な作品として「かな文字 (ひらがな)」で書かれた古いものは紀貫之の『土佐日記』(925 年、承平 5 年) があげられる。「かな文字 (ひらがな)」は、「万葉仮名」から「草仮名」と、移行しながら形成されていった。そもそも「万葉仮名」は、固有の文字を持たなかった日本で、中国から伝わった漢字を、漢字が持つ意味に関係なく、読み方 (音・訓) を借りて使用するようになったことが始まりである。使用過程で、「万葉仮名」は字画が多く、記述に時間がかかるという不便さから、簡略化した「片仮名」と「草仮名」が作られた。先ほど「かな文字 (ひらがな)」で書かれた最古の書物は『土佐日記』(925 年、承平 5 年) と記述したが、文字体系としての成立は、平安中期の『宇津保物語』(平安中期 10 世紀後半) ぐらいとされている。(沖森 1989、日本語学会編 2018)。「かな文字 (ひらがな)」は、多くの人々が使っていくなかで形成されていった。現在のひらがなの形は、1900 年 (明治 33 年) 小学校令施行規則改正で定められたものである。

一方、日本語が「ローマ字」で書き表されるようになったのは、室町時代末期 (1549 年・天平 18 年) スペイン人宣教師フランシスコ・ザビエル (Francisco de Xavier) が鹿児島に上陸してからであるとされている。

その後「ローマ字」は、多くのポルトガルの宣教師たちが布教のために来日し、彼らはそのために日本語を学び、ポルトガル語に基づいたローマ字の綴り方を考案した (小泉 1978、沖森、たなか 1995)。そして江戸に入ってキリスト教が禁止され、オランダのみとの交流が続く中で、オランダ人や蘭学者などがオランダ語に基づいた綴りを考案した。

1853 年に、浦賀にペリーが来航以降、蘭学に代わって英語による英学が中心となった。つまり幕末以降、欧米との交渉の結果ローマ字が広まったのである。そして、1867 年、アメリカ人宣教師 J. Hepburn が『和英語

林集成』を著し、1885年、チェンバレン、外山正一等によって「羅馬字会」が組織された。この両者の英語式のローマ字綴りがのちのヘボン式 (ex. sa shi su se so, ta chi tsu te to, ha hi fu he ho, za ji zu ze zo (同じ行の中で異なった子音が使われる)) のもととなった。しかし、1885年、田中館愛橘は日本古来の五十音図に基づいた綴り方 (ex. sa si su se so, ta ti tu te to, ha hi hu he ho, za zi zu ze zo (同じ行の中で同じ子音を使う)) をする「日本式」を提唱した。

以上が、わが国におけるかな文字とローマ字の歴史の概略である。以下、年表形式でそれぞれの歴史を詳しく述べていきたいと思う。本論において、筆者があらためてかな文字とローマ字の歴史について発見したという事実はない。けれども、さまざまな文献から拾い集めたかな文字とローマ字の歴史を見直すことで、今後の研究を進めていく上での資料となると考える。

以下、年表形式でわが国のローマ字の歴史を記述していくことにする。西暦の直前に、わが国のローマ字の歴史に関して直接的関連事項とされるものには◎を、わが国のかな文字の歴史に関して直接的関連事項とされるものには●を、間接的関連事項とされるものには※印を附した。それぞれの歴史的事項の最後に出展を明記した。

- |             |  |
|-------------|--|
| ※ 1866      | ・前島密が將軍慶喜に「漢字御廃止之議 (かんじおはいしのぎ)」を建議する (たなか 1995)。   |
| ◎ 1867      | ・ヘボンが、1863年にS.R. ブラウンが著した『英和俗語辞典』のつづり方に準拠して、英和辞典『英和語林集成』(初版)を上海で出版 (このヘボン式ローマ字一覧が小泉 1978にある)。  |
| ※ 1867      | ・10月：大政奉還 (児玉編 1997)   |
| ※ 1868 (M1) | ・明治維新 (児玉編 1997)<br>・江戸を東京と改称する。明治20年代までは「トウケイ」と発音されること多し (日本語学会編 2018)。   |
| ※ 1870 (M3) | ・大学規則・中小學規則頒布される (児玉編 1997)。   |
| ※ 1871 (M4) | ・文科省置かれる (児玉編 1997)。<br>・森有礼、米国言語学者ホイットニー宛書簡で英語を標準語とすることを提言 (日本語学会編 2018)。   |
| ※ 1872 (M5) | ・学生頒布。義務教育制度の実施 (児玉編 1997)。<br>・前島密が、「学制御施行二先ダチ国字改良相成度卑見内申書を建議 (日本語学会編 2018)<br>・南部 義壽 (なんぶよしかず) が、「文字ヲ改換スル議」を文部省に建白 (日本語学会編 2018)。  |
| ◎ 1872 (M5) | ・南部 義壽 (なんぶよしかず) が、文部省にローマ字採用に関する建白書を提出し、国字としてローマ字を採用することを訴える (岡倉 1946、小泉 1978)。<br>・ヘボンの和英辞典『和英語林集成』(第2版)刊行 (小泉 1978)。<br>・ヘボンは第2版において日本語の「ふ」は「fu」よりむしろ「hu」とする方が適当であると修正している (土岐 1935)<br>・広島師範学校長久保田讓、小学校でローマ字を教授すべきことを文部省に建議。<br>・1月：ロンドンでサンマースが「日本式前期」のローマ字のつづり方で日本語の五十音を示した「大西新聞」を発行する (土岐 1935)。 |
| ※ 1873 (M6) | ・馬場辰猪、英文『日本文法』をロンドン、ニューヨークで出版、日本式ローマ字つづり (土岐 1935)。※福元・小嶋 (2019) では、馬場は同書で「日本式」と「ヘボン式」の両方でつづられているとしている。  |

- ◎ 1873 (M6)
  - ・ 學士院長西周 (にしあまね) が「ヘボンやロニの日本語綴字の矯正」を唱える (田中館 1935)
  - ・ 国学者黒川眞頼、日本式で『横文字百人一首』を著し、「ローマ字書きによって日本語の本質を明らかにしようとした」(土岐 1935)。
  - ・ 加藤祐一、日本語学習者のための手習い本を、ほぼ日本式で『五十韻のわけ』を著す(土岐 1935)。
- 1873 (M6)
  - ・ 「東京仮名新聞」創刊 (1月創刊、2月廃刊) (日本語学会編 2018)。
  - ・ 「まいにちひらがなしんぶんし」(前島密) 創刊▷ 1874年廃刊 (日本語学会編 2018)。
- ◎ 1874 (M7)
  - ・ 西周が、『明六雑誌』(1873年創刊▷ 1874年11月廃刊)に「洋字ヲ以テ国語ヲ書スルノ論」を書き、「日本式前期」のローマ字つづりの見本を示す (土岐 1935、岡倉 1946、小泉 1978、日本語学会編 2018)。
  - ・ この年以降10年間ヘボン聖書の日本語訳に参加 (岡倉 1946)
  - ・ 『ものわりのはしご』清水卯三郎刊 (日本語学会編 2018)。
- 1874 (M7)
  - ・ 清水卯三郎が、『明六雑誌』に「平仮名ノ説」を書き、ひらがなの普及が、国民全体の知識や教養の工場に役立つと主張した (日本語学会編 2018)。
- 1875 (M8)
  - ・ 「平仮名絵入新聞」創刊 (日本語学会編 2018)。
  - ・ 「仮名読新聞」創刊 (日本語学会編 2018)。
- 1876 (M9)
  - ・ 「東京絵入新聞」(「平仮名絵入新聞」から改題) 創刊 (日本語学会編 2018)。
- ◎ 1876 (M9)
  - ・ 『ローマ字音図』(文科省) 刊 (日本語学会編 2018)。
- 1877 (M10)
  - ・ 「かなよみ」(「仮名読新聞」から改題) 創刊 (日本語学会編 2018)。
  - ・ 「いろは新聞」(「安都満(あずま)新聞」から改題) 創刊 (日本語学会編 2018)。
- ※ 1879 (M12)
  - ・ 教育令公布 (日本語学会編 2018)。
- ※ 1880 (M13)
  - ・ 改正教育令公布 (日本語学会編 2018)。
- 1881 (M14)
  - ・ 伊藤圭介、仮名説発表 (「東京学士会院雑誌」)
- ◎ 1882 (M15)
  - ・ カナダメソジスト協会の宣教師イビー (通称イビー) が、『六合雑誌』でローマ字説を発表 (日本語学会編 2018)。
  - ・ 植物学者矢田部良吉が、『東洋学芸雑誌』に「羅馬字ヲ以テ日本語ヲ書スルノ論」を書く (岡倉 1946、小泉 1978)。
- 1882 (M15)
  - ・ 歴史的かなづかいを主張する「かなのとも」、表音式かなづかいを主張する「いろはくわい」「いろはぶんくわい」が発足 (日本語学会編 2018)。
- 1883 (M16)
  - ・ 外山正一、山川健次郎、寺尾壽、松井直吉、箕作佳吉、矢田部良吉他でローマ字専用をめぐる議論が活発になる (沖森編 1989)。
  - ・ 「かなのくわい」合同結成 (日本語学会編 2018)。
  - ・ 「かなのとも」の会、趣意書を公表。5月より『かなのみちびき』(清水卯三郎編) 刊行 (日本語学会編 2018)。
- ◎● 1884 (M17)
  - ・ こうして仮名専用・ローマ字専用をめぐる議論が活発になる (沖森編 1989、日本語学会編 2018)。
- ※ 1885 (M18)
  - ・ 神田孝平が「東京学士会院雑誌」で「文章論ヲ読ム」を発表。▷ 術後「言文一致」の初出とされる用例あり。

- ◎ 1885 (M18)
  - ・1月:「羅馬字会」がチェンバレン、外山正一、矢田部良吉、神田乃武等によって組織される。ヘボン(すでに70歳)はこの会の顧問であった(岡倉1946、たなか1995)。
  - ・4月:この「羅馬字会」が、前期のヘボンの和英辞典『和英語林集成』(初版)をもとにして、『羅馬字にて日本語の書き方』を発表した。これは発音に従って子音を英語式で、母音字をイタリア語式で書き表す綴り方である(岡倉1946、小泉1978)。
  - ・羅馬字会機関紙「Romaji Zassi」創刊(岡倉1946、日本語学会編2018)。
  - ・8月:田中館愛橋が、羅馬字会式をつづり方があまりにも英語に傾斜していることを非難し、理学協会雑誌第16巻に『理學協會雑誌を羅馬字にて發兌するの發議及び羅馬字用法意見』を発表した。これがいわゆる「日本式ローマ字」と呼ぶ方式の原型となる(土岐1935はこれ以前の日本式に至るまでのつづり方を「日本式前期」と呼んでいる。小泉1978に「日本式ローマ字」の一覧表がある)。
  - ・日本式つづり方は日本古来の五十音図に基づいた綴り方で  
sa si su se so ta ti tu te to ha hi hu he ho zi di zu du  
のように同じ行の中で同じ子音を使う。つまり日本語の音素体系を反映した音素的表記方法である。また、名詞の語源は大文字で書くようにした(沖森編1989)。
- 1885 (M18)
  - ・「かなのくわい」、「もとのとも」と「かきかたかいりようぶ」とに分かれる(日本語学会編2018)。
  - ・三宅米吉が、『かなのぞつし』で「ぞくごをいやしむな」を発表(日本語学会編2018)。
- ※ 1886 (M19)
  - ・物集高見著の『言文一致』、矢野文雄著の『日本文体文字新論』、末松謙澄の『日本文章論』など言文一致論をといた書物が刊行される(日本語学会編2018)。
- ◎ 1886 (M19)
  - ・ヘボンが和英辞典『和英語林集成』(第3版、丸善商社)を著す。和英の部の主見出し、英和の部の全訳語がローマ字で掲出されている。このとき上記の「羅馬字会」のつづり方を採用したのだが、これが「ヘボン式ローマ字」(標準式)と呼ばれるようになったゆえんである(岡倉1946、小泉1978にその一覧表がある)。
  - ・ヘボン式は現在JRの駅名などに広く使われており(理由は後述)、shi chi tsu fu ji zuのように同じ行の中で異なった子音が使われる。つまり英語に立脚した音声的単音文字である(沖森1989)。
  - ・ルマシャレル『和仏大辞典』、ランゲンシャイト辞典シリーズ『日本語辞典』(和独)などがヘボン式によるなど、欧米では日本語がほぼ一様のローマ字綴りで認識されるようになった(玉村1997)。
  - ・田中館愛橋主宰の Romazi Sinsi (ローマ字新誌) 創刊される(田中館1935、岡倉1946)。
  - ・これ以後、ローマ字運動はヘボン式と日本式の両派の争いとなる(山口1997)。
  - ・10月:末松謙澄、羅馬字会の制定に対し、「綴字の際に字数を減少する必要を説き、日本式と一致したつづりを提案した『日本文章論』を著す(土岐1935)。
- ※ 1889 (M22)
  - ・大日本帝国憲法発布
- ◎ 1891 (M24)
  - ・井上哲次郎が、『羅馬字雑誌』でローマ字説を発表(日本語学会編2018)。
- ◎ 1892 (M25)
  - ・ヘボン帰国
- ※ 1894 (M27)
  - ・8月:日清戦争始まる(児玉1997)。
  - ・4月:日清戦争終わる(児玉1997)。
  - ・上田万年が、「新国字論」を口頭で発表(日本語学会編2018)
- ※ 1895 (M28)
  - ・『帝国文学』創刊。創刊号に、上田万年が、「標準語に就きて」を発表するなど、この年、国字問題について盛んに発表された。(日本語学会編2018)。
- ◎ 1897 (M30)
  - ・西周没(日本語学会編2018)。

おわりに

本稿では、年表形式でわが国のかな文字とローマ字の歴史を記述してきた。記述して見えてきたことは、ローマ字の場合は、「ヘボン式」か「訓令式」かの2種類の表記方法が生まれ、やがてどちらの表記が便利なのかの論争が起こる。一方、かな文字の場合は、当時すでに人々になかな文字の存在が認知されていたためか、少なくとも1875年（M8）創刊の「平仮名絵入新聞」の時点で、一音一文字の表記でほぼ統一されていたことがうかがえる。このように、現在につながる一音一文字のひらがな表記の原則が、国から打ち出されるよりも前に、大衆向けの書物から始まったことは興味深い。この理由としては、活版印刷における活字使用においては、一音一文字が便利であるからという、出版社の意向が大きかっただろう。その後、義務教育の普及によって、かな文字の一音一文字の原則がより強固なものになり、これが現在につながっていると考えられる。これらの詳しい流れについては、次回に譲ることとしたい。

#### 【参考文献】

- イ・ヨンスク（1996）『「国語」という思想』岩波書店  
岡倉由三郎（1946）『ローマ字の話』（福原麟太郎編）研究社  
沖森卓也（1978）『日本語学史』おうふう  
橋田広国（1992）『日本のローマ字運動』日本ローマ字研究会  
小泉保（1978）『日本語の正書法』大修館  
児玉幸多編（1997）『日本史年表』吉川弘文館  
酒井直樹（1996）『死産される日本語・日本人「日本」の歴史—治世的配置』新曜社  
鈴木康之（1977）『国語国字問題の理論』むぎ書房  
たなかみのる（1995）「ひらがな と ローマ字」『Rômazi Sekai』1995-5 No.625 Rômazikai  
土岐善麿（1997）「日本語の表記法とローマ字における外来語・外国語の表記」『国文学解釈と鑑賞』至文堂 1997.1  
日本語学会編（2018）『日本語学大辞典』東京堂出版  
平仮名絵入新聞（1875）国文学研究資料館デジタル資料  
<https://base1.nijl.ac.jp/~kindai/img/MNAY/MNAYT-00181/MNAYT-00181-01.jpg?log=true&mid=MNAYT-00181&d=1586491689766>（2020/04/10 閲覧）  
福元美和子・小嶋栄子（2019）「日本語教科書におけるローマ字綴りに注目して—明治初期のある3冊について—」『長崎短期大学紀要第31号』長崎短期大学